

動詞重複形・接頭辞・補助形容詞関係論考 追補：
「ひとつむすびてはゆひ[☒]して」 /
「直後」の意の動詞重複形 / 「ウチカヘス」 /
「～ヅライ」の動向

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44773

動詞重複形・接頭辞・補助形容詞関係論考 追補

—「ひとつむすびてはゆひくして」／「直後」の意の動詞重複形／
「ウチカヘス」／「くツライ」の動向—

近藤 明

Supplement to Remarks on Verb Reduplication, Prefixes, and Auxiliary Adjectives

AKIRA KONDOH

本稿は筆者の動詞重複形・接頭辞・補助形容詞に関する既発表の論考に関して、発表後気がついた用例等を追加し、考察を補おうとするものである。なお注・参考文献等は各節ごとに示すものとする。

—「ひとつむすびてはゆひくして」—

① かりのこの見ゆるを、これ十づつ重ねるわざをいかでせんとて
手まさぐりに、生糸の糸を長うむすびて、ひとつむすびてはゆ
ひくして、ひきたてたればいとよう重なりたり。

(蜻蛉日記 上巻 康保四年三月)

旧日本古典文学大系 一五八②

の「ひとつむすびてはく」は、意味としては「ヒトツムスブ」動作をしてはその都度「ユフ」ことを繰り返す、というものと見て異存の無いところであろう(注1)。しかしながらこの箇所をどう読む

かについては

i 「ヒトツ ムスビテハ ユヒユヒ」と、「ユヒ」のみを繰り返して読む。

ii 「ヒトツ ムスビテハ ユヒヒトツ ムスビテハ ユヒ」と、全体を繰り返して読む。

iii 「ヒトツ ムスビテハ ユヒ ムスビテハ ユヒ」と、「ヒトツ」は繰り返さずに、「ムスビテハ」以下を繰り返して読む。

のいずれであるのか、この表記からは特定できない。くの字点「く」は、現代では二字分の繰り返しを表すという感覚があるが、『国語学辞典』(東京堂出版)「重点」の項(山田忠雄執筆)は「く」が代表する字数(音節数と言ってもよい)は不定である」とし、酒井憲二(一九八〇)は古語におけるくの字点「く」について「要するに「く」は直前の二字以上の繰り返しを示すものであり、原則として無限定。それを決するのは一に文脈による」としており、現代の感覚から安直に「ヒトツムスビテハユヒユヒ」という読む

み方を採るわけにはいかない。

当該の用例について蜂屋真郷(一九八七)は、「ムスピテハにはヒトツが上接して、実際に「反復される動作はヒトツムスピテハユヒである」と見られるが、ヒトツを含めたそれを重複するとは些か考えにくい」とし、複合動詞の重複に準じる「イッテハカヘリイッテハカヘリス」の類に含められる可能性にも触れつつ、「暫くは通説のようにユヒユヒス」と読むものとして単独の動詞の重複のものに入れておくという扱いをしている。

これは「/」を二分の繰り返しを表すものと限定しないことを前提とした上で、かつ意味上の反復の範囲と形態上の重複の範囲とが必ずしも一致せず、前者よりも後者が狭くなる場合もある(例えば全体を重複させることがあまりに煩わしいといった場合)と、すなわち

意味上の反復の範囲

≡

形態上の重複の範囲

のような関係を想定しての考えと思われる。

近藤明(一九八八)(一九八九)では、①のような「V1テハV2」だけでなく「V1バV2」等の場合も考察の対象に加えた上で、ローマ字表記や、現存の写本でく字点を用いず通常の仮名・漢字での表記がされていて、重複の範囲が明らかである用例等を手がかりにして、何らかの傾向・法則性を見出すことで、①のようなものの読み方を絞っていこうという手法をとった。その結果、例えば、
 ②(坂東の武者は)軍には親も討たれよ子も討たれよ、死ぬれば乗り越え(kinureba noricoye, noricoye)戦ひまらす。

(天草版平家物語 卷二第十 一五一②)

の例の場合、意味上は(親や子が)「死ぬ」こととその度に「乗り越える」という一連の動作の反復なのであるが、形態上重複している

のは「乗り越え」だけであるように、ある程度古い時代まではV2が複合動詞である場合はV2のみが繰り返されるようである等、現代よりも重複の範囲が狭めであるといった見当を得ることはできた。

しかしながら筆者の整理の手際の悪さや、右記の手法の有効性がそもそもどの程度のものであるかといった問題もあって、①の用例のような場合は明確な結論を得ることはできないままであった。一連の動作をどの程度入念に描写しようとしているかによって差異が生じることもありそうだが、そのことも当時は十分思い至っていないかったし、蜂屋真郷(一九八七)の存在を知ったのが近藤明(一九八八)(一九八九)を念頭に置いているのか、単に

その後、今西佑一郎(一九九九)は、「絹糸で卵をくりその作業をつぎつぎに繰り返して卵を重ねるといふ実際に倣すれば、「一つむすびてはゆひ一つむすびてはゆひして」と、読まれるべきであろう」との見解を示しているが、蜂屋真郷(一九八七)、近藤明(一九八八)(一九八九)を念頭に置いているのか、単に

=

意味上の反復の範囲

形態上の重複の範囲
 という前提で、かつ現代語の感覚をそのまま古語に適用し得るとの認識に基づいてのことなのか、判然としない。
 ただ、その後近現代語において、「ひとつむすびてはゆひ」と同様の

数詞・V1・V2

が繰り返される例を目にする中で、次の③～⑥のように数詞を含めて全体が

数詞・V1・V2 数詞・V1・V2

と繰り返される例を複数見出し得たことから、少なくとも近現代語においては近藤明(一九八八)執筆時に漠然と考えていたよりも数詞を含めた全体の重複が行われ易いようにも思われてきた―後述のよ
うに、それをただちに①のような古代語の用例に適用し得るかどう
かは別であるが。

③夫は晩御飯のときにそれ(引用者注・観音の絵・畳の上い広げ
て、一と箸たべては見、一と箸たべては見いして、

(谷崎潤一郎「世」その五 谷崎潤一郎全集[中央公論社]

第十一卷 四一六⑫)

④まだいくらか残つてゐた酒に未練おをぼえて、一と口飲んで
書き、一と口飲んで書きしたが

(谷崎潤一郎「蘆刈」『改造』昭和七年十一月号(注2)

⑤一粒たべると走りまはり、それから一粒たべると走りまはり

(井伏鱒二「朽助のゐる谷間」

(井伏鱒二全集「筑摩書房」第一卷五一⑬)

⑥で、二、三段のぼつては休み、二、三段のぼつては休み、休む
たびに腰をのぼして、それからまた、エッチラオッチラとの
ぼつてゆくのね。

(吉野源三郎「君たちはどう生きるか」七 石段の思い出」

岩波文庫 一四二⑭)

いずれも、V1の動作をわずかに行つてはその都度V2の動作を行
う、ということ繰り返すのを、入念に描写している、という共通
性があるように思われる。ただし、用例①の描写にもこれらと同等
の特徴を認め得るかということもあるし、前述のように古い時代に
おいては現代語と比べて重複の範囲が狭められる節もあり、こ
のことをただちに用例①の読み方に適用することには慎重にならざ
るを得ない。

なお修飾成分・補充成分が伴い、それが数詞以外のものである場
合でも、次のような例が見られる。

⑦(引用者注・茶碗の葉を)飲まうとして茶碗を置き、飲まうと
しては茶碗を置いて居ると

(夏目漱石「吾輩は猫である」二一

(漱石全集岩波書店 新書版「六七下段⑯)

⑧ぬる／＼と手がかりのない舷に手をあてがつては滑り、手をあ
てがつては滑りしてゐた。

(有島武郎「生れ出づる悩み」六

有島武郎全集第三卷 四一八⑰)

⑨父は、大皿に盛られた桜桃を、極めてまづさうに食べては種を
吐き、食べては種を吐き、食べては種を吐き、さうして心の中
で虚勢みたいに呷く言葉は、子供よりも親が大事。

(太宰治「桜桃」 太宰治全集「筑摩書房」10 三八二⑱)

いずれも補充成分「茶碗を」「種を」「手を」が省略されることなく
繰り返されている例であるが、この中で⑨の例について考えると、
桜桃を口に入れて、食べられる果肉の部分は飲み込み、種だけを吐
き出すという意味を正しく伝えようとすると、補充成分「種を」も
含めて繰り返さざるを得ない。仮に「種を」を省略して繰り返さな
いとすると、「一粒食べては種を吐き、食べては吐き、食べては吐
き」となり、後半は食べられる果肉の部分までも吐き出しているか
のようになってしまう、右記のような意味が正しく伝わらない恐れ
がありそうである。

描写がどの程度入念であるかに加えて、このような要因も重複の
範囲に影響を与え得るものとして考慮に入れることが必要な場合も
あろう。

注

- (1) 意味上の繰り返しは「反復」、形態上の繰り返しは「重複」と呼んで区別することがある。なお動詞の重複といっても、「泣き泣き帰る」のような並行動作を表す動詞重複形等と比べて、この種のものは文法的というよりは、修辭的な性格が強いように思われる。例えば用例③のように三回繰り返されるというのは、前者では考え難いことであろう。
- (2) 谷崎潤一郎全集(中央公論社)の本文(第十三卷 四五五⑦)では読点が減っている(他に「おを」の転倒も正されている)が、重複箇所に関する筆者の意識がよりよく伺えそうな初出本文によった。用例③も一応初出(『改造』昭和三年七月号)を確認したが、「畳の上い」が「畳の上へ」であった他は、論旨に関わる部分の異同は無かった。

参考文献

- 近藤 明(一九九九)「あなはら〜」考(森重敏先生寿喜記念)ことばとことのは』和泉書院 のち『蜻蛉日記覚書』岩波書店 二〇〇七年
- 近藤 明(一九八八)「動詞重複型継起反復表現の重複範囲―ひとつむすびてはゆひ〜」等の読み方―(『梅花短期大学研究紀要』三六)
- 近藤 明(一九八九)「中世後期口語資料・近世における動詞重複型継起反復表現―同じ所へ行つては帰り行つては帰り―」(『梅花短期大学研究紀要』三七)
- 酒井憲二(一九八〇)「猫またよや〜」考(『リポート笠間』二一)のち『老国語教師の「喜」の字の落ち穂拾い』笠間書院 二〇〇四年
- 蜂屋真郷(一九八七)「重複サ変動詞の構成―動詞の重複統考―」(『ことばとことのは』四)のち『国語重複語の語構成論的研究』塙書房 一九九八年。引用は初出によった

二 「直後」の意の動詞重複形

近藤明(二〇〇一)において、

- ①「こんどのもまた、女学校出え出えのたまごじやいよったぞ」(壺井栄『二十四の瞳』新潮文庫 七⑧)の「出え出え」について、「出た(卒業した)ばかり」という「直後」の意を表しているかと思われるとの見解を述べた。飯間浩明(二〇〇三)には

この「出え出え」というへんなことは、ぼくにもなじみ深いことばです。意味は「出たばかり(卒業したばかり)」ということですが。関西方言には「取れ取れ」(取れたばかり)のように動詞を重ねる言い方があり、谷崎潤一郎『猫と庄造と二人の恋な』にも「鱈の取れ取れ」「鰯の取れ取れ」と出てきます。その同類でしょう。(p152)

とあり、その地域の出身者にとっては指摘されるまでないことであつたのかも知れない。

ただし「出え出え」や「とれとれ」(注1)はともかく、「直後」の意の動詞重複形として一般化して見た場合、必ずしも小豆島のような瀬戸内地方や関西地方に特有とも思われない節がある。

- ②小屋の中が真暗になった日のくれ〜に
(有島武郎「カインの末裔」(五))
有島武郎全集『筑摩書房』第三卷 一一四⑩

- ③夜のあけ〜に大捜索が行はれた。
(同(六)) 一一〇⑩

- ④いま、米をといだばっか、とぎとぎの米を炊くと、こわ飯になつて、年寄りの胃にもたれッすけえ
(相沢直人『そうれいば―死体焼却処理場風景―』
河出書房新社 六一⑭)

②の「くれぐれ」、③の「あけあけ」は、いずれも『日本国語大辞典 第二版』にも立項されているが、これを用いている有島武郎は東京都出身であるし、④の「とぎとぎ」は「といだ直後」の意味で

あることは、「米をといだばつかで」から明らかであるが、著者の相沢直人氏は新潟県燕市出身であり、作品の舞台は同市がモデルと思われる「スズメ町」で登場人物の使用する方言もその地域を想起させるものである。従って、「直後」の意の動詞重複形の現代における地域的分布については、右記以外の地域も視野に入れる必要や、語ごとの相違を考慮に入れる必要がありそうに思われる。

なお「直後」の意と見られる動詞重複形の古典作品における用例として、近藤明(二〇〇一)において、

⑤まだ起きくゝの禿ども

(近松浄瑠璃 けいせい反魂香「一七〇八年初演」中之巻)

旧日本古典文学大系『近松浄瑠璃集 下』一四五④

⑥さすがの私も宿にも居ず、在宿もいたしません所へ、御使だと申事で、帰りくゝ宿で申しますには、池の端さまで開帳が始まりますそふだと申すすゆへ

(花暦八笑人 三編上「一八二三年刊」岩波文庫 一二四⑧)

の二例を掲げた(注2)。前者の「起き起き」は、『日本国語大辞典 第二版』にも立項され、「起きたばかりであること」と語義が記されており、⑤の用例もその線で異論の無さそうなところである(注3)。用例⑥は、池の端の佐次郎からの廻状と開帳を間違えて、というギャグになるのだが、家に帰ったばかりのあたふたしている中で聞き違えたということで、「直後」の意に解し得るかと思う。

この他

⑦俺も今有馬から戻つたれば、もどりくゝ四貫匁といふ銀は取出しにくい

(近松歌舞伎 傾城壬生大念仏「一七〇二年初演」中)

旧日本古典文学大系『歌舞伎脚本集 上』七六⑭

も、旧日本古典文学大系の頭注は「戻る途中で」とするが、「戻つてすぐに」という「直後」の意に解されるべきであろう。発言者の

七左衛門は、道芝の年季明けや銀四貫目が必要になったことを、有馬から戻る途中で知っていたわけではなく、この場で聞いたところなのである。

また嘉永三年(一八五〇)刊の「なぞなぞ春の雪」に収められる三段謎に

⑧四月八日の御誕生トカケテ めづらしい軽業

心ハうまれくゝのしやかだちじや

(音誠「なぞくゝ春の雪」翻刻・紹介)

『金沢大学語学・文学研究』十三 一九八四年
というものがあるが、この「うまれくゝ」も、「生まれてすぐ」という「直後」の意味がありそうである(謎としては「生まれ生まれの釈迦立ち」と「稀々の逆立ち」とを掛けたものか)。

なお近藤明(二〇〇一)では

⑨萩の花くれくゝまでもありつるが月出てみるになきがはかなき

(金槐和歌集「貞亨四年版本」旧日本古典文学大系 二二〇)

⑩「モウ、アカンカイ?」くゝ「ああ、もう、こらア、死に死にや」
(開高健「日本三文オペラ」新潮文庫 一五九⑩)

のように、「直前」の意に解されるものもあることを指摘した。『日本国語大辞典 第二版』の「あけあけ」の項は、「夜が明けようとするころ」と、「直前」「直後」のいずれであるかははっきりしない語釈をした上で、史記抄の用例を掲げている。

⑪平明ト云、平旦ト云ハ、夜ノアケくゝゾ。

(桃源瑞仙講 史記抄 劉叔孫列伝第三十九)

「二四七六〜一九八〇年」『史記桃源抄の研究 本文篇四』八四⑫
前述の「くれぐれ」についても『日本国語大辞典 第二版』の語釈は「日が暮れようとする頃」というものであるが、前掲②の「くれぐれ」は「真暗になった」とあるところから「日の暮れる直前」で

はなく「直後」と考えられるものの、⑨の方は「日が暮れて見えなくなる直前までは萩の花が散り残っていたが、月が出て月明かりで見えるようになった時は既に散って見えなくなっていた」と解するとすると、「直前」の意になる。〔くれぐれ〕については、「くらぐら」と読まれている用例についての検討等も場合によっては必要となるかも知れない）

そのような「直前」の意のものがあるとして、「直前」の意と「直後」の意のいずれになるかがいかなる要因によって決まってくるのか、時代的にはどういう関係にあるのか、あるいは「直前」と「直後」を包括した「時間的近接」の意くらいに考えるべきであるのか、といった点も問題になるところであろう。

注

(1) 「とれとれ」は、遡ると「とりとり」という形があり、『日本国語大辞典 第二版』にはそれが立項されており、第一掲出例は虎寛本狂言である。東海道中膝栗毛の「また秋にお出なさるととり／＼の松茸じゃ」(七編下 旧日本古典文学大系 四〇八⑤)という例は、京都の「へんぐり屋与太九郎」の発言におけるもの。

(2) 用例の引用は近藤明(二〇〇一)におけるよりも詳しく引用した。同様に用例⑩も、辞書に掲げられたものよりも詳しく引用した。

(3) 『日本国語大辞典 第二版』における「起き起き」の第一掲出例は、俳諧・猿蓑(二六九一年)の用例であるが、次の例はそれよりも古い例として挙げられそうなのである。

・元日の朝ふと起き／＼、女房のいひけるやうは

(醒睡笑「一六二八年献呈」卷八「祝済た」)

醒睡笑 静嘉堂文庫蔵 本文編『三三七⑩』

・朝起き／＼絶へず使うふよし

(わらんべ草「一六五八年定稿」四 七五段 岩波文庫 三三〇③)

参考文献

飯間浩明(二〇〇三)『遊ぶ日本語 不思議な日本語』(岩波アクティブ新書)

近藤 明(二〇〇二)「主體変化動詞が重複形になる場合」(『金沢大学教育学

部紀要 人文科学・社会科学編』五〇)

三 「ウチカヘス」

近藤明(一九九九)において、古代語の「ウチカヘス」のうち、「ウチ」が接頭辞化していると見られるものについて、その意味を「反転／逆方向への移動／元の状態への変化／逆転・一転／反復」の五つに分けて考察した。このうち「反転」とは、『角川古語大辞典』で「①裏返す」とされているものであり、衣服の表裏を逆にするとといった例もあるが、回転軸が想定できるような場合は、中古頃においてはほぼ一八〇度の回転を意味するものようである。

①火桶の火、炭櫃などに、手のうらうち返し／＼をしのべなどしてあぶりたる者

(枕草子 「にくきもの」段 新日本古典文学大系 三三三⑬) この種の「ウチカヘス」について、中世後期の抄物における次のような例の存在にその後気がついた。

②輓ハ転ノ半ゾ。一メグリマワラウラ半斗リ廻ツタヲ輓ト云。転ハ一メグリグラリト打カヘスゾ。

(清原宣賢講 毛詩抄「一五三五年以前講」)

卷一 閑雅 抄物資料集成一九オ⑥)

「輓転反側」の「輓転」に関する注で、この場合、「一メグリグラリト打カヘスゾ」とあることから明らかのように、「ウチカヘス」は三六〇度の回転を表している。近藤明(一九九六)をはじめ、「接頭辞ウチ十動詞」に関する一連の考察において、「接頭辞ウチ」は古

代語においては下接する動詞の意味を弱める方向に働いているが、中世以後意味を強める方向に転じたと見られるとの考えを示している。

「ウチ」を伴わない「カヘス」の意味が抄物においてどうであったかを調べないと、「ウチ」が伴うことによって意味が強められたと言えるのかは明らかではないが、中古の頃の「反転」の意の「ウチカヘス」と比べてより強い意味に転じたと見られる例として挙げられておくと次第である。

なお「接頭辞ウチ+動詞」に関する一連の考察において、近現代の「ウチ」を主に「強意」との観点から捉えてきたが、菊地康人（一九九四）は「無沙汰に打ち過ぎまして」の「打ちすぎる」のようなものを、「改まり語」の色彩を帯びた例として挙げており（p. 三二〇）、「ウチ」の近現代語に至るまでの変容について考える場合、そのような観点が必要になる場合もあるかも知れない。

また山王丸有紀（二〇一一）は、従来動詞に由来すると考えられてきたこの「ウチ」について、名詞「内」に由来するとの考えを示しているが、阿部裕（二〇一一）は上代文献における漢字のあてられ方から、これに否定的な見方をしている。いずれの考えが言語事実によりよく沿い、よく説明し得るのか、考えていきたいところである。

参考文献

- 阿部 裕（二〇一一）「上代日本語の動詞接続ウチーについて」（『日本語学会二〇一二年度秋季大会予稿集』）
- 菊地康人（一九九四）『敬語』角川書店 のち講談社学術文庫 一九九七年
- 近藤 明（一九九六）「ウチワラフ」の意味の時代的变化」（『国語語彙史の研究』十六）
- 近藤 明（一九九八）「ウチカヘス」考―「ウチ」が接辞化しているもの

場合一（『金沢大学教育学部紀要 人文科学・社会科学編』四七）
山王丸有紀（二〇一一）「接頭語と解される「うちー」について―源氏物語における「うちー」を中心として」（『汲古』六〇）

四 「ツライ」の動向

動詞に下接して困難の意を表す「ツライ」については、「自然現象を表す動詞や非意図的な動詞には付きにくい」「雨が降りづらい」「『明鏡国語辞典』大修館書店』と言われ、しかし例えば「醤油が出づらい」の場合、醤油が出ないのをもどかしい・じれったいと思う人間が言外に居るような場合は、右のような動詞でも可という指摘もされている（徐修程（一九八三））。これに対して、苦痛を感じる人間の存在が想起されず、困難であることに対してマイナス評価が伴わない中立的、あるいはプラス評価を伴う用例も見られるようになってきている旨、近藤明（二〇〇四）で言及し、「近い将来この用法が一般の出版物にも現れたり、あるいは更なる将来この用法が広く受け入れられ、正用として定着することがあるかも知れない」との考えを述べた。

筆者の関心は主に「ニクシ／ニクイ」の歴史的变化との類似性にある、また個人のブログに見られるような用例に関しては慎重な態度をとってきたのだが、次の用例は全国紙の記事それも社外の執筆者等によるものではなく記者の署名記事におけるものである上に、相当極端な例と感じられる。

心不全に広く使われる心臓ホルモンの製剤に、がん細胞を転移させづらくする働きがあることを、国立循環器病研究センターと大阪大などの研究チームが見つけた。（中略）心臓にはがんが転移しづらいことから、チームは心臓に特有なANPというホルモンに着目。

(『朝日新聞』二〇一二年 十月二四日 「権敬淑」の署名あり) がんの転移が起きるのが困難であることを、尋常の価値観を有した人間が苦痛に感じマイナス評価するということはまずなく、研究者としての立場としてもせいぜい中立的、一般読者はもちろん、研究者であってもがんの有効な治療法開発を目指すといった立場が投影していればプラス評価されそうな性質であろう。かつて同社校閲部は

物は「燃えにくい」と言いますが、「燃えづらい」とは言いません。つらく感じる人間が不在だからです。(中略)ただ、最近は何物についても「づらい」表現が目立ちます。「手に入りづらいチケット」「見えづらい文字」などは、話し手の気持を婉曲に表そうとしているようです。

(同紙二〇一〇年十月二七日 「校閲部・塚本真理」の署名あり) という見解を示している。これは「アート作品は売れづらくなっている」という表現についてのものではあったが、前掲の用例はその域を大きく超えるものと感じられる。この間における「〜ツライ」の変化の進展の一端を示すものかと考え、記しておく次第である。

「〜ニクシ／ニクイ」においては、中立的もしくはプラス評価と思われる用例が抄物において見られたものの、それが拡大し、容易に見出されるようになるまでは数百年単位の長い時間を要したようであった(近藤明(二〇〇六)(注1)。それと比べると「〜ツライ」の同様の変化の進展は急速であるように見え、近藤明(二〇〇四)で予見した事態が思ったよりも早く実現しつつあるようにも思われる。引き続き注視を要するところかと思う。

ちなみに金城克哉(二〇一一)は、コーパスを活用し多量の言語データを生かした有意義な論と感じられ、

従来指摘されていた「『〜づらい』は無意志動詞とは結びつかず話し手自身に困難さの原因があることを示唆する」という用

法、特に自動詞の用法と総称解釈に変化が見られるとの見解も首肯できるものであるが、その趣旨に通じる指摘は、近藤明(二〇〇四)等でも行ってきたつもりである。

注

(1) 近藤明(二〇〇六)の時点では、夏目漱石の作品に中立的もしくはプラス評価の「〜ツライ」の用例を見出せないでいたが、近藤明(二〇一三)でも触れたように

はからざる病のために、周囲の人の丁重な保護を受け、一步浮世の風の当り悪い安全な地に移って来た様に感じた。

(「思ひ出す事など」十六

漱石全集(岩波書店 新書版)四三下段©

という例を見出し得た。ただ、昭和も戦後にならないと容易に見出せるようにはならないという大筋においては変わらない。

参考文献

神作晋(二〇〇六)「形容詞型接尾語「〜にくい」「〜づらい」の動向」『国語研究』六九

語研究』六九

金城克哉(二〇一一)「コーパス分析に基づく「〜にくい」「〜づらい」表現の研究」『琉球大学留学生センター紀要 留学生教育』八

近藤 明(二〇〇四)「〜ニクシ／ニクイ」の語史への一視点―現代語「〜ツライ」との対照から―」『金沢大学教育学部紀要 人文科学・社会科学編』五三

近藤 明(二〇〇六)「〜ニクシ／ニクイ」の意味・用法の時代的变化―室町期以降を中心に―」『国語語彙史の研究 二二五』和泉書院

近藤 明(二〇一三)「形容詞系難易表現の史的变化をめぐって」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』五

徐 修程(一九八三)「〜にくい」と「〜づらい」の異同について」『日本語

学人間社会学域学校教育学類紀要』五

徐 修程(一九八三)「〜にくい」と「〜づらい」の異同について」『日本語

学人間社会学域学校教育学類紀要』五

教育研究論纂』一)

三木 望(二〇〇四)「『くらら』について―自発と否定、可能の連続性―」

(岸本・影山編『日本語の分析と言語類型―柴谷方良教授還暦記念論文
集―』くろしお出版)